

ACROSS 速報版

2019年9月11日 第94号

人間関係こそビジネス成功の鍵 ～令和に活かす成功の知恵～

2019年9月7日立命館大学経営学部校友会第1回セミナー、懇親会が東京キャンパスのあるサピアタワー6階・ステーションコンファレンス東京605A会議室で開かれました。講師の論語普及協会理事・豊中稲荷神社権禰宜の辻田充司氏より「人間関係こそビジネス成功の鍵～令和に活かす成功の知恵～」という表題でお話いただきました。講演は孔子の『論語』をもとにした大変興味深いお話でした。終了後の懇親会にも多くの方がご参加され、辻田氏とお話を楽しまれ、あっという間に時間が経ってしまいました。以下、概要をお届けいたします。



【 講師 辻田 充司 氏 】

縁尋機妙 本日この場でお話させていただけましたのもありがたい縁尋機妙（えんじんきみょう）によるものです。『論語』には、人との縁

に感謝し、それをむすび・つなぎ・いかし発展させるための気づきが書かれています。『論語』の解釈本は数多くありますが、立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所名誉顧問である加地伸行先生の本、本校友会でも講演された伊與田覺先生が浄書された『仮名論語』がお薦めです。20歳の時に父が帰幽しましたが、父より長く30年間師事した仲人でもある伊與田覺先生は、「道縁は無窮だね」との安岡正篤先生との最後の会話の言葉を良く言われました。私は、幸い神職もしておりますが、それは、安岡正篤先生との著書の出逢いに始まる伊與田覺先生とのご縁、そしてそこから発展しお一人の縁でも切れたら繋がらなかつた神職への道縁によります。又、勤務先の会社が倒産しましたが、そのおかげで人の心をベースとして経営し、コンパ文化を大事にする会社のグループ社員となり、飲食を共にし垣根を外し語り合うことで2つの会社出身者がお互いの価値を認め合い、見事に統合する過程を経験し、経営におけるコミュニケーションによる「和」の重要性を体感するなど、「縁」に導かれて活かされている人生を歩んでいます。

孔子の人生と論語 今日は、『論語』をできるだけご紹介したいと、資料として21章句取り上げたのですが、9章句でも触れられたらと思っています。『論語』と言えば、素読が基本ですので、皆さんと一緒に論語の章句を斉唱し、論語から繋がる易の関連事項も参考として進めてまいります。しかし『論語』20篇全てはご紹介できませんので『学而第一』の小冊子をお配りいたしましたので、後でお読みください。孔子の生涯ですが、多くの門下を輩出しました。孔子は、中国に紀元前551年に生まれ、479年になくなられた2500年前の人物です。現在、第79代の

嫡長孫が台湾におられ 孔 垂長といわれます。孔子は人を育て、国をよくしたいという思いで活躍された人生でした。日本には4世紀頃に百済の王仁（わに）博士により伝えられたといわれており、大阪の藤阪に傳王仁墓があります。

『論語』が日本人に受け入れられたのはなぜか

人は、なじみのあることや過去に経験したことは受け入れやすいものです。逆に初めて聞き知ったこと、新しく教え諭されるものには、得てして抵抗しがちです。ですから、論語が日本人に抵抗感なく受け入れられているのは、論語に書かれている章句が、普段から当たり前のごとくに行動の規範としていたことなので「その通り！」と素直に受容できたからです。つまり、『論語』の精神は、日本の国土に住まう人々の民族性として元々、根付いているのです。論語は神道＝日本の文化と親和性があったからなのです。また、『論語』の心は「仁」と言われますが、今上陛下を「徳仁（なるひと）」、上皇陛下を「明仁（あきひと）」とお呼びしますように、皇族親王のお名前には「仁」という字が使われます。伊勢神宮の式年遷宮における宇治橋掛け替えの渡り初め式において、親子三代が夫婦で揃う家のおばあさんが先頭で渡り、各都道府県の親子三代が続いて渡ります。めでたさが続く家の気を受けようということからそうになっています。いい流れをくみたいというのは、日本人なら誰も思うところだと思います。日本人が謙虚な国民性なのは、『論語』の精神が自然に備わっていることの表れです。

小論語 企業の価値を因る尺度の一つとして、創業後の年数があります。『論語』は2000年以上前からのベストセラーですから、『聖書』のように歴史の波に揉まれながらも読み続けられてきました。ですから、人生に活かすことができる本と言えます。そのように多くの先人が読み活学してきた『論語』とは、孔子と弟子が語り合ったことを中心に10巻20篇約500の章句にまとめられたものです。「子」とは曾子、孟子、老子、とありますように先生のことを指します。先生と言えば孔子のみだった時代からの章句は、「子曰わく」と「子」で済ませますが、多くの弟子により孔子の教えが語られた時が経過してからの章句は、誰の言葉かを明確にするために「孔子曰く」とあり、論語が時間をかけて編集されたものであることが判ります。つまり、多くの弟子の受け取り感じ方が異なり伝

えられてきた孔子の言葉が紆余曲折を経てまとめ上げられたものが『論語』です。その第一篇である学而の開巻第一章は小論語といわれ、『論語』の核となる章句です。「子曰く、学びて時に之を習う、亦説（よろこ）ばしからずや。朋（とも）遠方より来る有り、亦樂しからずや。人知らずして慍（うら）みず、亦君子ならずや。」これは学習のことを言っています。「時に」というのは「必要に応じて」という意味です。時たまではありません。「時常」という中国語もあり、意味合いは常にという意味です。「習」とは、幼鳥が羽を繰り返して、繰り返して羽ばたかせることで飛ぶことを習得することを表した字です。従って、学んだことを繰り返し、繰り返し実践してようやく体得できることはよろこばしいことだと言っているのです。机を並べ学んだ友が、遠方から共に学ぼうと来てくれた。そのような同志がいるのは楽しいものだ。そして人が自分の存在を認めてくれなくても、そのときは、自己責任、全て自分を主にもって他人の責任にせず自分の為すべきことを為す。いっさい言い訳をしないのです。



陰陽 「子曰わく、吾十有五にして学に志し、三十にして立ち、四十にして惑わず、五十にして天命を知り、六十にして耳順（した）が、七十にして心の欲する所に従えども、矩（のり）を踰（こ）えず」

「子曰わく、我に数年を加え、五十にして以て易を学ばば、以て大過無かるべし。」

孔子は、学で身をたてる生き方に確信を持ち歳を重ねていきましたが、50歳前に知識を積み重ねるだけの学び方には限界を感じられたようです。そして自然には、男女、朝夜、晴雨と両極端の陰陽がある。このように陰陽が組み合わ

さることで波動 (Vibration)、リズムとなり自然を構成する。その陰陽の学問、「易」を学びひらめきを得れば、大きな問題は起こらないと言われていて。パソコンは易から発想を得て発明されました。陽と陰つまり 1 と 0 です自然の理法、陰陽を 50 歳までに学ぶのです。そうすることで自分の生きるべき”天命”を知り、必然である自然から気づきを得ることで自然と正しく生き方となった生涯を語られています。

日本語は自然そのもの 我々が普段使っている日本語 50 音は、正に一音一音に陰陽の世界、両極端が内在しています。「ま」は真であったり、「魔」であったりします。陰陽です。これは両方とも必要で、両極が存在しているということです。よい意味も悪い意味も両方です。世の中両極端が存在しているのです。「ひ」も火であったり、氷であったりします。日本人は、自然そのもの陰陽を言葉としてきたのです。善悪は人の立場、捉え方の解釈で変わるものです。自然には受け入れがたい出来事もありますが、抗しきれないものであることを天災が多い国土に住まう日本人は感得し、自然に畏怖感を抱きました。だから日本語には陰陽の相反する意味合いが含まれます。「結構です。」と言えば、状況に応じて受諾であったり拒否であったりするように、日本語の 50 音の一音一音には、両極端の意味が内在しています。

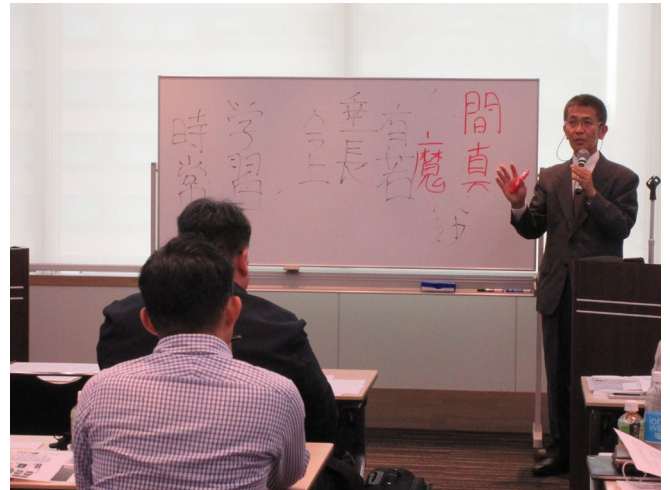
見えざるものを畏敬する 「祭ること在于（いま）すが如くすし、神を祭るには神在（いま）すが如くす。子曰く、吾祭に与（あず）からざれば、祭ざるが如し。」

神、即ち畏敬するものへの姿勢、心の持ち方が述べられています。目に見えるものだけでなく、目に見えないものを大事にする風習が普通の日本の家庭にあります。この章句は「お天道さんが見てござる」の見えざるものを大切に尊ぶ、おじいちゃん、おばあちゃんから教えられる生き方でもあります。

イメージすることが大事 「冉求（ぜんきゅう）曰わく、子の道を説（よろこ）ばざるに非ず。力足らざるなり。子曰わく、力足らざる者は、中道にして廢す。今、女（なんじ）は画

（かぎ）れり。」

この章句が、ビジネス成功の鍵、人生の生き方への大きな気づきとなると捉えています。皆さんに一番ご紹介したい章句です。西洋の成功哲学と言われるものそのものです。画という字に（かぎる）との訓読みをあてはめている所に先人の智慧を感じています。画（かぎれり）はイメージで、「できない」と思った（イメージした）からできないのです。チャレンジしなかったからいけないのです。潜在意識にカラーで鮮明になるまでイメージせよ、思えといひます。画像を持ち、素直に自分の中に落とし込めばその通りのことが起こります。できると信じ切ったことはどんなことでもできるのです。まず、やってみることです。



完成していないから成長する 「曾子曰わく、吾日に我が身を三省す。人の為に謀りて忠ならざるか、朋友と交わりて信ならざるか、習わざるを傳うるか。」

『論語』はまた、こうも言っています。人間は完成していないからまだ成長するのです。悟っていると思ったらおしまいです。常に今の自分を振り返り反省し、改める必要があります。神道の禊祓や「異心（ことごころ）を去れ」に通じます。できるだけ体を清らかにしたい。常に自分を省みてよくしたい。そう思うことが大切です。常に自分の行動を省みる、三省することで、改め戻すべき、ずれに気づき、元からあるべき状態に戻すのです。



『論語』の道は仁＝忠恕 「子曰わく、参（しん）や、吾が道は一以て之を貫く。曾子曰わく、唯（い）。子出ず。門人問うて曰わく、何の謂いぞや。曾子曰わく、夫子の道は忠恕（ちゅうじょ）のみ。」

孔子の道は一言で言えば、仁＝忠恕です。まこと（自分に対すること）と思いやり（人に対すること）という陰陽、相手と自分があるの仁です。一番大事な仁は、二人の人、相手と私。一人だけではないのです。人間ふたり、が大事なのです。関係です。それに対する自分の気づきが大事です。「縁尋機妙」自分に関係ないことは絶対に起こらないのです。陰陽両方考える必要があります。いい面と悪い面の両方考えるのです。人間のエネルギーのもとである電気がプラスとマイナスで中性であるように、陰陽揃い、プラマイゼロが世の中の基本です。

「子貢（しこう）問うて曰わく、一言にして以て身を終うるまで之を行うべき者有や。曰わく、其れ恕（じょ）か。己の欲せざる所、人に施すこと勿れ。」

『論語』の教えは「仁」といわれますが、「仁」のありかたとしてこの2つの章句では、より詳しく「忠恕」であること、真心からの思いやりと言っています。そして、自分が好きだと思ふもの感じるものを相手が同じだとはかぎりません。「恕」とは自分の良かれと思ふことを人にすることは、価値観の違いで親切の押しつけになることもあるので、自分が嫌と感ずることを人に対してしないこと、相手中心に行動すること、それが思いやりだと述べています。

令和 『論語』はまた「礼の和を用（もつ）て貴（たつと）しと為（な）す」と「和」が大事

だとしていますが、なれあいではなく「礼」がともなうことが大事です。世の中に偶然はなく、縁は繋がっています。礼は令に通じ、「令」＝筋目、規則とは、今という漢字に一本筋を加えた字、今を一つの筋道・信念で貫き通し、一貫して生き切るということです。

答えは自然にある 「子曰く、予（われ）言うこと無からんと欲す。子貢曰わく、子如（も）し言わずんば、則（すなわ）ち小子何をか述べん。子曰わく、天何をか言うや、四時（しじ）行われ、百物生ず、天何をか言うや。」

答えは自然の中に表れている。師からの教えだけに依存せず、自然の変化するものと変化しないものの波動を感じ取り、ひらめきを得るのです。自然の摂理から学びきづくこと「易」が大事といえます。目に見えないエネルギー、世の中を左右している＝運、運命についていいますと、身の周りには無数の電波が飛び交っています。携帯電話は電話番号の独自に持つ固有周波数が共振することで通話できるように、なるものはなると天命を信じ切り、明確に念じて引き寄せ立命するのです。『運命と立命』という本で「運命は変えられないものではない。善きことを行いなさい、そうすれば、あなたの人生は好転していきます」とあります。宿命と違い運命は、縁あり出会うものごとを自分の責任・気づきの種と感謝と喜びで良き風に受け取ることで努力次第で変えられるものです。 彌榮

〈参考書籍〉

仮名論語 伊與田覺著
仮名孝経 辻田愛子浄写 辻田充司読み下し
共に NPO 法人論語普及会発行
運命と立命 安岡正篤講録 関西師友協会発行
紙幅の都合でカットしなければならなかったことがたくさんあります。ご寛恕下さい。（松村）

【立命館大学経営学部校友会】

〒567-8570 大阪府茨木市岩倉町 2-150
TEL:072-665-2090 FAX:072-665-2099
E-mail: info@ritsba-kouyukai.jp